

形容詞 *sad* は古英語では 1. *satisfied, sated, weary of* (飽き飽きした、満足した) という意味で用いられ、この意味は15世紀半ばまで続く。OED には a1310 年の例として、*For selden y am sad that semly forte se.* (うるわしきかの人を眺め飽くことは今はまれ) を載せている。しかし、欲望を満たした人はほかの人より安定した精神状態になることから、落ち着いた、真面目な態度で前よりも自分の仕事に励むようになるものである。14世紀の初めに 2. *settled, steadfast, firm* (落ち着いた、しっかりした、固い) という意味が生じ、ラテン語の *solidus, firmus* を英語に翻訳する際に用いられていた。チョーサーからの OED の引用、*c.1374 Ther may no man dowte that ther nis som blyfulnesse þat is sad [L.solidam] stydefast and parfyt* (Boeth. III . Pr. X . 70 (Camb. MS.) はボエティウスの *solidam* を翻訳した例である。ただし、OED はすでにチョーサーの時代に 5. *sorrowful, mournful* (悲しい、悲しみに沈んだ) という意味が生じとしているが、確かな例は15世紀に入ってからである^(注2)。シェイクスピアでは、軽薄さ、陽気さの反語としてしばしば「真面目な」という意味で用いられている。有名な例として、*a jest with a sad brow* (真面目くさった顔で言う冗談、2H4. V . 1. 92)、*in good sadness* (生真面目に、本気で、Wiv. III . 5. 125)がある。しかし、シェイクスピアではすでに *Your sad (heart) tires in a mile-a.* (悲しき胸は一マイルに倦む、WT. IV . 3. 126)のように「2. 真面目な」からさらに一步を進めた「5. 悲しい」という意味で多く用いられている。そして17世紀以降は現今の「5. 悲しい、悲しみに沈んだ」に限定された。OED の7の意味は人の性格を表す「真面目な、落ち着いた」からの類推で物体について用いられるようになった方言で、*sad bread* は「ふくれそこねて生焼けのパン」を意味し、口語では *sad dog* 「ならず者」にみられるように「真面目な」とは反対の6. *deplorably bad* 「ひどい、始末におえぬ」という意味にまで変化している。^(注3)

多義語 *sad* の意味変化から観察されることは、第一に、いくつかの古い意味は後に生じた意味と重なり合うことがある。第二に、ふたつ以上の意味が長い間共存することがあるが、最初の意味「あきあきした」からかけ離れた

現今もっとも普通の意味「悲しい」という意味とは時期が重複していない。また、「ひどく悪い」はよい意味2,3,4 が消滅した後である。

I.1.2 silly

sad と同じような意味変化をした語に silly がある。silly の意味変化の概要を OED によって検証する。

第二図 silly の意味変化 (Menner, p.66)

	700-1000	1100	1200	1300	1400	1500	1600	1700	1800	1900
2. happy, blissful	(gesælig-iseli) - _____ seely _____ 1482									
3. spiritually blessed	_____ 1225 _____ 1400									
4. pious, holy, good	_____ 1225 _____ 1450									
5. innocent, harmless	_____ 1290 _____ 1604									
6. deserving pity, helpless	_____ 1297 _____ 1609									
(1) silly-forms	_____ 1425 _____ 1680.....									
	_____ 1680 Northern & Scottish									
	silly sheep 1500 _____									
7. insignificant, trifling mean, feeble	_____ 1297 _____ 1642									
(2) silly-forms	_____ 1567 _____ 1794.....									
	_____ Scottish									
(3) silly: unlearned, simple, ignorant, homely	_____ 1547 _____ 1798									
(8) foolish, simple	_____ 1529 _____ 1605									
(4) silly-forms	_____ 1576 _____									

ヒューズ (G. Hughes, *Words in Time*, 1988, p.11) は、メナーの上図を簡潔に下図のように表している (筆者加筆)。

第三図 ヒューズによる silly の意味変化

	Old English		Middle English		Modern English		PE
	700	900	1100	1300	1500	1700	1900
2. happy, blessed	_____ OE sælig _____						
5. innocent, harmless	_____ ME seely _____						
6. deserving of compassion	_____ Mn. silly _____						
7. weak, feeble	_____						
7. simple, ignorant	_____						
? feeble minded	_____						
8. foolish, empty-minded	_____						

silly の場合、OED が seely, silly というふたつの別個の見出しで掲載しているためにわかりにくくなっているが同一の語である。OE 期の記録には残されていない形容詞 gesælig (副詞 gesælige は記録にある)、中英語 iseli であり、seely は中英語に普通の形態、silly は15世紀に現れた形態である。

ヒューズはこの図に “Summary: Silly has undergone **deterioration**, particularly since c.1600” とのみ注して silly が「意味の下落 (deterioration)」の典型的な例として言及しているだけだが、OE 以来の良い意味 (blessed, innocent) とそれとは相反する1600年以降の新しい悪い意味 (simple, foolish) は用いられた時期が重なっていないことに注意すべきである。^(注4)

I.2. 外来語

I.2.1. nice

英語に借用された外来語には著しく意味変化した単語がいくつかある。例。nice, fine, large, fine, person, danger, cheer, device。ここでは nice, fine を取り上げる。

第五図 nice (Menner, p.68)

	700-1000	1100	1200	1300	1400	1500	1600	1700	1800	1900
1. foolish, stupid					1290	_____	1557			
2. wanton, loose-mannered					1325	_____	1558			
3. strange, rare						1413	_____	1555		
4. tender, effeminate							1562	_____	1710	
5. coy, shy						1400	_____	1634		
6. fastidious, dainty, refined, particular							1551	_____		
15. agreeable									1769	_____

nice はラテン語を語源とする (Lat. nescium < ne “not” + scire “to know”) 「無知な、無邪気な」を意味するフランス語 nice から借用され、英語に入ってからさまざまな意味変化を経た。特に、16,17世紀における nice のひとつひとつの意味の特定は難しいと OED も記している (OED, nice)。現在では、6. fastidious, dainty, refined, particular (気難しい、繊細な、微妙な) と

15. agreeable (快い) のふたつの意味だけが残されている。nice の場合も、古い、悪い意味、1、2、3 は現代の新しい、いい意味 6、15 とは重複していない。また、現在使われている 6 は用いられる文脈が限定されており、15 と混同されることはない。^(注4) 例えば、nice ear, 「鋭敏な耳」、nice distinction of meaning 「意味の微妙な相違」は「6. 繊細な、微妙な」であって「15. 好ましい」とは区別される。

I .2.2 fine

第六図 fine

700-1000 1100 1200 1300 1400 1500 1600 1700 1800 1900

I . Finished, consummate in quality

1. Of superior quality, 1250 _____
 2. (a. of metal; b. of gold or silver; pure, refined, of liquids) 1300 _____
 5. (Of persons) skillful 1320 _____

II . Delicate, subtle

- 6b. Of immaterial things: delicately, beautiful. 13?? _____
 7. Delicate in structure or structure 1386 _____
 8. Of a tool: sharp 1400 _____ 1622
 10.a. (Of distinctions) delicate, refined 1567 _____

III . Senses developed in English (chiefly =Fr. beau)

12. admirable in quality 1440 _____
 13. (Of persons & things) handsome 1340 _____
 14. Of handsome size 1590 _____
 14.b. (Colloquially) very large; also followed by *large, big, etc.* 1833 _____
 15.,. Of weather: Free from rain 1704 _____
 16.,. Of dress: Highly showy 1526 _____

fine は借用されて以来、フランス語の時代にすでにあった古い意味を廃用にすることなく維持した上に、さまざまな意味を発達させたために非常に多義な語となった。Fine の意味変化にみられる第一の特徴は、OED が詳細に注記していることからもうかがわれるように多義でありながら、使われる文脈が明確に区別されていて意味が曖昧になることはまずないと思われることである。第2に、OED も明記しているように、借用もとのフランス語 fin のみ

ならず、意義Ⅲ12-16 はフランス語 beau の意味まで借用している(Ⅳ参照)。第3に、sad, silly, nice, と同様に反対の意味まで生じている。

Ⅱ. 多義語の共時的実態: stout

多義語は発話された場合も聴取された場合も一回一回の意味の特定が難しいのではないかと思われるが、OED に記載されている多義語の意味をすべて記憶していて日常生活で満遍なく使い分ける人はいないであろう。さらには、方言により、あるいは使用域(register)により実際に使われる意味はかなり限定されている。言語地理学という手法を用いて、多義語が実際に使用される具体的な場面ではそれほど曖昧ではないことをメナーは stout, clever を例に挙げて通時的・共時的に証明している。

第七図 stout の意味変化(Menner, p.71)

	1300	1400	1500	1600	1700	1800	1900
1. proud, haughty, arrogant	1315	_____			1669	dialect
2. fierce, furious, menacing	1300	_____			1601		
3. valiant, brave	13..	_____			1727	arch. in <i>stout soldier</i>
(d) in resistance				1582	_____		
							<i>stout heart, stout resistance</i>
4. firm in resolve, unyielding, determined		1390	_____			<i>stout enemy</i>
5. strong of body		1386	_____			1842	
12. thick, corpulent						1806	_____

1. proud は古フランス語時代にすでにあった意味である。中英語では、3. brave, etc. であり、5. strong まで拡大された。3, 4 は慣用表現(stout soldier, stout heart, stout enemy, stout resistance) としてのみ残っている。現代の標準英語で唯一普通に使われる意味は18世紀までは記録のない 12. thick, corpulent である。この意味は古い意味が実質的にはすべて廃用になってから生じており 1-5 とは重複していない。

メナーは stout の伝統的な意味5. strong と新しい意味 12. thick, corpulent に関するインフォーマントのさまざまな回答を詳細に検討して次のように結論している。都市部では12. thick, corpulent が用いられる一方、地方では 5. strong が用いられる傾向があるが、新しい thick, corpulent が古い strong を侵食しつつある。教養のない、あるいは年配のインフォーマントは strong、比較的教養のある、あるいは比較的若いインフォーマントは thick, corpulent を用いる傾向がある。インフォーマントの一人一人も言語共同体全体としても stout 一語にふたつの意味を持たせることにより生じる曖昧さを避けようとする傾向がある。つまり、多義語は具体的に使用される場合には個々の話者ばかりでなく、言語集団全体に明確な使用上の制約が共有されており曖昧さを生じない傾向にあるようである。そして「実際に使う意味」と「知ってはいるが使わない意味」とを区別する。このことから、多義によって生じる可能性のある曖昧さはさまざまな形で回避されていることがわかる。変化過程の渦中にある stout のふたつの意味のせめぎあいの実態調査は、共時的研究である言語地理学と OED にもとづく歴史言語学とが同じ結論に至っていることを示している。

第八図 clever の意味変化

	1300	1400	1500	1600	1700	1800	1900	
I. nimble-handed [doubtful quot. of 1200], dexterous, skillful				1580	_____			
II. nimble, active, neat, handsome					1674	_1735.....		
							dialect	
III. handy, neat, agreeable, 'nice'					1715	_____1883.....		
							dialect	
(c) good-natured						1773	_____	

多義語が意味変化する場合、元の意味とかけ離れた意味は同時期に重複して用いられることはない。clever のいい意味である I .skillful と皮肉的用法から生じたどちらかというとも良くない意味 III .(c) good-natured の関係にも認められるとおりである。重複している場合は、古い意味が特定の文脈に限られ

て用いられるか、特定の成句に限られて用いられているために現実の言語生活においては曖昧さを生じる可能性は少ない。(注5)

Ⅲ. 意味の多義化から文法化へ：fair

第四図 fair の意味変化(Menner, p.68。語義の右のカッコ内は OED の語義番号)

700-1000 1100 1200 1300 1400 1500 1600 1700 1800 1900

- | | | |
|--|-----------|-------------------------|
| 1. beautiful (I.1) | _____ | _____ |
| 2. light as opposed to dark (II.6) | _____ | 1551_____ |
| 3. free from blemish, pure (III.7,8,9) | 1175_____ | _____ (1858-in phrases) |
| 4. favorable, benign (IV) | _____ | 1205_____ |
| 5. free from bias, equitable (III.10) | _____ | 1340_____ |
| 6. pretty good, passable (III.11) | _____ | _____ 1860_____ |

fair にはそれぞれ異なった時期に生じ、現在も用いられている6種類の意義がある。しかし、複数の意味が平行して用いられていても不都合は生じていないことがわかる。古くからある意味にはかなりの使用上の条件があるからである。例えば、I「美しい」は現在では詩ときわめて華美な文体にのみ用いられる。IIの light-haired (金髪のは)は blond に置き換えられつつある。IIIは、fair copy, fair fame という成句に限られ、果物、白紙、水については用いられない。IVは天候についてのみ用いられる。現代では、中英語に始まる III.10 equitable, just (公平な、正当な)と19世紀半ばに始まる III. 11の passable (まずまずの、並の)が一般的といえる。いずれにしても使われる文脈を厳密に点検すれば fair の用法はかなり明確に分類されていて、実際に使われた場面で曖昧さを生じる可能性は少ないといえよう。多義語の古い意味とそれとはかけ離れた新しい意味とは時期をずらせる傾向があるが、fair にみられるように古い意味と新しい意味とが平行して用いられても具体的な使用にはそれぞれ制限・区別があつて曖昧さを生じることはないといえよう。fair の意味変化から、一見多義の語もうまく使い分けられ、曖昧さが生じないようになっていることがわかる。

IV. 文法化の歴史的原因：英語、フランス語、ドイツ語の比較言語史的考察

形容詞の多義化は意味の分析的傾向と考えることができる。というのは、fair にみるように、単語が特定の意味から抽象度を高めて、具体的に使用される場面での文脈(どのような名詞を修飾するか)、用法(どのような語と成句をなすか)によって意味が決定されるからである。この傾向はフランス語に特有の傾向である。例えば、現代フランス語の beau は英語の fair と同じく多彩な意味を持つ。

第九図 現代フランス語 beau の意味

1. (男女について)美男子の、美女の
2. (知的、芸術的に)優れた
3. (精神的に)高貴な
4. (卑近な意味で)見事な、belle salade 立派なサラダ菜
5. (社会的に)優れた
6. (天気・気候が)よい
7. (過去の事柄について)幸福な
8. (礼儀が)正しい
9. (数・量が)多い、恰幅のいい(男女)[皮肉]

(『仏和大辞典』白水社、1981)

beau の持つそれぞれの意味は『仏和大辞典』が訳語の左側のカッコで詳細に指示しているように使われる場面・文脈によって決定されている。また、9 の意味は 1 からの比喩・皮肉から生じた意味で、fine とよく似た発展である(美しい→大きい)。

形容詞の多義化はフランス語の影響と考えられる。フランス語はノルマン征服以降約300年間イギリスの支配階級の言語として君臨し、その影響はただ単に語彙を多数借用したという表層面にとどまらず、英語の語彙構造の中核にまでその影響は及んでいる。フランス語が英語の文法組織の単純化、屈

折活用の水平化に広く深い影響を与えたことは周知の事実である。^(注6) 従って、フランス語の語彙の分析的特性が英語の語彙変化にも影響を与えたとしても不思議ではない。フランス語は各単語の抽象度が高く、表現は分析的に行われる。例えば、動詞 *mettre*, *faire*, *prendre*, *tenir* は特定の具体的な意味を持たずほかの単語とともに、あるいは特定の文脈で用いられることによってはじめて具体的な意味を持つ。特に、*mettre* ほど抽象化した動詞はほかの言語にはない。また、*faire* は他のすべての動詞の代用をつとめることができる。英語の *do*, *have*; *put*, *set*, *make*, *take* はそれぞれ「する、行う」、「持っている」、「押す、突き刺す」、「置く、据え付ける」、「行動する、作る」、「触れる、捕まえる」という具体的な意味で用いられていたが、抽象化（文法化）傾向にある。この点でドイツ語とは異なる性格を持つ。英語はドイツ語と同じゲルマン語であり、古英語の時代にはまだ総合的であったが、度重なる異民族との接触により英語は中間言語 (*interlanguage*) 化して分析化が進んだ。この点は、先住民族、ケルト民族、ラテン民族、ゲルマン民族と融合して、中間言語化し、分析化が進み、さらには抽象化へと推移したフランス語とよく似ている。フランス語は英語と並んでほかのヨーロッパ諸言語にぬきんでて分析的言語なのである。分析的傾向はやがて抽象化に向かう。^(注7)

mettre, *faire* といった抽象的な動詞、動詞的意味を失った動詞が発達したフランス語では、かえっていろいろな具体的な意味を表すことができるようになった。 *le livre est sur la table* (本は机の上にある) というのと同じように *l'homme est dans la rue* (その人は通りにいる) ということができる。ところが、ドイツ語では、 *le livre est couché* (本が横たえられている。G. *liegt*) と *l'homme se tient debout* (人が立っている。G. *steht*) では *liegt*, *steht* という別々の動詞を使い分ける。

名詞を例に挙げると、英語の *the big stone* はそのままドイツ語には翻訳できない。 *the big stone* は抽象的で何格であるのか明示されていない。主語、目的語、補語のいずれにもなれる。ところが、ドイツ語では、主語であれば *der grosse Stein* という形態しかありえない。 *den grosse-en Stein* であれば

対格でしかありえない。dem grosse-en Stein (e) は与格である。Des grosse-en Stein-s は属格である。いずれの格も特定の形態を持ち一般的抽象的に表現する手段がない。^(注8) 英語はノルマン征服以後著しく分析的傾向を強めてきたが、フランス語には及ばず、まだ具体的なところがあって、to put と to place とを区別する。また、ドイツ語と同じ区別がある (to set, to lay ; G. setzen, legen)。フランス語では、動きを表すものはもうこれ以上なくなつては理解に支障をきたすところまで来ている。ドイツ語は、setzen 「立たせておく」と legen 「寝かせておく」を別々の語で表すがフランス語では同じ語を用いる (F. placer, placer couché)。

一般的に、英語の文法にみられる分析的傾向はフランス語の影響と考えることができるのであれば意味変化における分析的傾向・抽象化もフランス語の影響と考えることができるのではないか。英語が度重なる異民族との接触で中間言語的性格を帯びるようになり文法組織が単純化され分析化がすすんだことが共通の素地としてあり、このことが英語の文法面と同じく語彙・意味の分野にも分析化・抽象化傾向を助長させたと考えることができる。

これに反して、ドイツ語は古期高地ドイツ語の時代から複雑な屈折を保存した結果総合的な性格を堅持している。例えば、主格、対格、与格がまったく同じ形態をとる、無格的、抽象的な英語の the big stone はドイツ語に翻訳することができない。ドイツ語の der gross-e Stein は排他的に主格であり、通格的な the big stone とは違う。gross-e という形容詞と定冠詞 der によって主格であることが明瞭に示されている。対格の den gross-en Stein、与格の dem grosse-en Stein (e) 属格の des grosse-en Stein-s も同じことが言える。英語の場合、互いに不慣れな言語を持つ異民族との接触により中間言語化して、語尾屈折の代わりに前置詞と語順にたよるようになった。フランス語 d'un chapeau gris とドイツ語の eines grauen Huts を比べると、ドイツ語では、個々の単語がそれぞれ独立して存在し全体としてはフランス語ほど緊密ではない。ところが、フランス語の場合、個々の語は独立していなくて互いに依存しあって全体で始めてまとまった意味をなしている。その意味では全体に

抽象度が高い。フランス語は分析的傾向からさらには抽象的傾向へと推移してきた。英語はノルマン征服以降そのようなフランス語の分析的・抽象的傾向への影響を受けてきたために語彙の意味も抽象度を高め、特定の文脈、特定の修飾語との関係におかれて始めて具体的な意味を持つという傾向を強めてきた。そのもっとも典型的な形容詞の例が *fair* である。*fair* は抽象化して、*fair* 自体はこれという意味を持たず、具体的な文脈を与えられて始めて意味をなす。

もうひとつ、フランス語の *farouche* を例に取る。『仏和大辞典』（白水社）には「◆野生の、人になれない ◆交際嫌いの、内気な ◆獐猛な、残忍な」といった意味が並んでいる。特に「内気な」と「獐猛な」とは反対の意味である。ところがフランス人が *bête farouche* という語から連想するのは「野うさぎ、鹿」の類であって、「野生の獣」という訳語から日本人が連想するライオンやトラとは違う。つまり、「野生の」という意味は「自然のままの状態、飼いならされていない」であり「飼いならされていないので人を恐れすぐ逃げる」この意味から「内気な」という意味が生じるのである。一方では、「野生の→粗野な、荒々しい」から *un air farouche* 「荒々しい様子」、*un regard farouche* 「残忍な目つき」が生じる。*farouche* は「自然のままの状態」という抽象的な意味が核となり、その時その場面における具体的文脈の中で修飾する名詞によって具体的な意味が決められる。

V. 結論

英語の語彙の中でも著しく意味変化した基本語彙の形容詞を取り上げて多義化の経過と結果を検討してみると、第一に、もともとの意味から大きくかけ離れた意味、反対の意味は元の意味が廃用になった後に生じており混同されることはない。第二に、意味が多義となった場合も、それぞれの意味の間には用いられる文脈、用法に制限があり曖昧さを生じることはない。第三に、個人としても共同体としても、「使う意味」と「知っているが使わない意味」とがあって使い分けられている。第四に、英語の形容詞の多義化・分析化は、言語として分析的傾向をもつフランス語の影響と考えられる。意味の多義化

は、分析化・抽象化へと進み文法化へと推移する。形容詞の意味の文法化は英語という言語に観察される一般的な分析化傾向・文法化現象と軌を一にするものと考えられる。ただし、名詞、動詞の文法化と形容詞（副詞）の文法化には品詞の性質上、分析化、抽象化、文法化の過程・程度・結果には自ずから違いがある。形容詞（副詞）は分析化・抽象化には至っても完全に文法化はしないようである。また、文法化の原理のひとつに、一方向性（unidirectory）という現象があげられるが副詞には逆戻りの現象もあるようである。

【参考：go の意味変化】

辞書に記載してある、かけ離れた意味の共存、併用は言語の運用に不都合をきたすように思われる。しかし、辞書に記載してある複数の意味の重複使用が言語の実体を正確に反映しているとは必ずしも言えない。

ひとつの単語に複数の意味が平行して用いられ、曖昧さがあるのではないかと思われる場合が OED に記載してある go である。OED によると、go には古英語時代から「歩く」という意味があり引用例は1000-1836年となっている。c1000, c1200, a1300, c1386, 1387, 1412-20, c1450, 1523, までは50年から100年に1例という OED の原則どおりである。が、16,17世紀には特に多数の例が掲載してある。81年間に10例という引用例数は異例である。1587, a1592, 1605, 1611, 1628, 1633, 1661, 1684, 1751, 1768, そして最終例が1836年である。この引用例の分布を見るとあたかも go の「歩く」という意味が16, 17世紀に非常に頻繁に使用されたかのような印象を持つ。しかし、事実は逆である。単独で用いられた「歩く」は早くから walk が取って代わり、チョーサーの時代には go が「歩く」を意味する場合は必ず移動を表すほかの動詞と対比してのみ用いられている。

従って、確かに go は「歩く」という意味でチョーサーの時代にもバニヤンの時代にも用いられているが必ず移動を表すほかの動詞と対比してのみ、化石化して用いられている。例えば、ride, run, creep (go and ride, go and run)。バニヤンの I am resolved to run when I can, to go when I can not run, an

creep when I cannot go. (走れるときは走り、走れないときには歩み、歩めない時には這っていく覚悟だ) (J. Bunyan, *The Pilgrim's Progress*, 2, 313) はその最後を飾る典型的な文である。OEDはこの時期における go の「歩く」の意味に限り収集し得たすべての例を記載したのではないか。

注

- (注1) Menner からの引用 (図) は原文のまま。
- (注2) OED は 5. Of persons...Sorrowful, mournful. の初例として、?a 1366 CHAUCER, *ROM. ROSE*...Ful sad and caytif [orig. *meigre et chetive*] was she. を引用し、さらに、5c. でもチョーサー『カンタベリ物語』の「騎士の物語」の a sad visage (A2985) を 'Expressive of sorrow' の初例としてあげているがかなり疑わしい。諸版、注釈は 'steadfast' あるいは 'serious' と解釈している。メナー (1945) も OED の 1366 年の初例を確実ではないとみて点線にしている。C.S. ルーイスも 'serious' と解釈している (『語の研究』1974, p.89)。
- (注3) sad と語源を同じくするドイツ語の satt は古期高地ドイツ語以来「飽き飽きした、満足した」という意味を変えていない。英語とドイツ語ともにもととの意味を残している場合でも英語の単語はドイツ語にない新しい意味をいろいろと併せ持つようになるのが通例である。例。knight (< "servant"), town, tide(="time"), to write, to read, to kill, glad; G. Knecht(="servant"), Zaun(="fence"), Zeit(="time"), reissen(="to tear"), raten(="to guess"), quëlen(="to kill"), glatt(="smooth")。ただし、clean-G. klein (="small" < "clean") のようにドイツ語の方が意味変化した例外もある。
- (注4) silly と語源を同じくするドイツ語の sëlîg は古期高地ドイツ語以来変わらず現在も「祝福を受けた、幸福な」を意味する。英語の単語の中には著しく意味変化する傾向があるのに反しドイツ語の場合あまり意味変化しない場合が多いというもうひとつの例である。
- (注5) 多義語が曖昧さを生じて、意味変化を余儀なくされるのは、その多義語が持つ複数の意味が同じ時期に、同じ文脈、同じ意味の場で用いられてしかも違う意味で用いられる場合である。17世紀の色彩語に多義語が生じる場合がよくあった。purple は17世紀には「紫色」と「赤い(血の)色」の両方を意味していたために曖昧さが生じて不都合を生じて、「赤い(血の)色」は廃用になった。wan も、17世紀には「(病的で)青白い色」と「鉛色」のふたつの意味で用いられていたが現代では「青白い」のみが用いられている。rent 「貸す、借りる」は「貸借関係」という同じ意味の場で用いられ、しかも反対の意味で用いられるがあいまいさはない。「貸す」場合には rent something to somebody、「借りる」場合には rent something from somebody という違う文構造で用いられるからである。

(注6) M. Townend は中英語期のイングランドにおける、ラテン語、ノルド語、フランス語の混在とこれらの言語の英語への影響の大きさを従来以上に強調しているが本稿ほどに具体的には述べていない。

(M. Townend, M. Chapter 3. *Contacts and Conflicts: Latin, Norse, and French in The Oxford History of English*, ed. by L. Mugglestone, 2006.)

(注7) ドーザ、pp.420-23。

(注8) ドーザ、p.423、泉井、pp.10-11。

参考文献

- Bally, C. *Linguistique générale et Linguistique française*, 1932, 1965⁴.
シャルル・バイイ『一般言語学とフランス言語学』小林英夫訳、岩波書店、1970。
Bradley, H. *The Making of English*, 1904, 1968.
ブラッドリ『英語発達小史』寺澤芳雄訳、1982、岩波文庫。
Dauzat, A. *Le genie de la langue française*, 1942, 1949.
ドーザ『フランス語の特質』杉富士雄ほか訳、大修館書店、1982。
Lewis, C. S. *Studies in Words*, 1960, 1967.
ルース『語の研究：ヨーロッパにおける観念の歴史』本田錦一郎ほか訳、文理、1974。
Meillet, A. *Linguistique historique et linguistique générale*, 2 tomes, 1921, 1936.
メイエ『いかにして言語は変わるか』松本明子訳、ひつじ書房、2007。
Menner, R. J. "Multiple Meaning and Change of Meaning in English", *Language*, 21, 1945.
Mugglestone, L. ed., *The Oxford History of English*, 2006, OUP.
池上嘉彦『意味論』大修館書店、1975。
泉井久之助『ヨーロッパの言語』岩波新書、1968。
泉 邦寿『フランス語、意味の散策』大修館、1989。
伊吹武彦ほか編『仏和大辞典』白水社、1981。
国広哲也『意味論の方法』大修館書店、1982。